

## 26. SPECTによる肝脾容積と<sup>99m</sup>Tc-スズコロイド肝脾摂取率測定(瀰漫性肝疾患における診断的意義)

四位例 靖 滝 淳一 油野 民雄  
利波 紀久 久田 欣一 (金沢大・核)  
松平 正道 (同・RI部)

<sup>99m</sup>Tc-スズコロイドを用いた肝スキャンは、有用な検査として種々の肝疾患に用いられてきたが、最近ではSPECTを用いた肝脾容積測定および肝脾摂取率測定が行われるようになった。今回われわれは、瀰漫性肝疾患56例に対し、planarとの比較を中心にSPECTの有効性について検討した。

その結果、従来のplanar像にSPECTを追加しても大きな意味合いはなく、したがって、<sup>99m</sup>Tc-スズコロイド肝スキャンにおけるSPECTの意義は、VOLUME測定もしくは小欠損像の検出にしばられるのではないかと考えた。

## 27. 肺炎に対する<sup>67</sup>Ga-citrateイメージングの診断的有用性

油野 民雄 横山 邦彦 (金沢大・核)  
鹿熊 一人 (能登総合病院・放)  
三林 裕 (同・内)  
一柳 健次 (福井県立病院・中放)  
羽場 利博 (同・内)

急性上腹部痛の一因である膵の急性炎症の際、胆道シリンチ上胆嚢が描出され、急性胆嚢炎との鑑別が可能であるが、稀に胆嚢が描出されず、急性胆嚢炎と誤診されることが少なくない。一方、急性膵炎に対する独自の診断法として、<sup>67</sup>Ga-citrateの陽性集積が報告されているものの、診断的有用性が以外と知られていないのが現状である。今回、CT超音波等で、明らかな形態異常を示さず、<sup>67</sup>Ga-citrateの瀰漫性異常集積を呈した膵の急性炎症2例を呈示し、膵炎における<sup>67</sup>Ga-citrateイメージングの診断的有用性を強調した。

## 28. 腹部Ga-67 ECTの有用性

仙田 宏平 田内 圭子 中条 正雄  
長谷川みち代 安江 森祐 梅村 実  
(国立名古屋病院・放)

腹部のGa-67 ECTの有用性をXCT所見と比較検討した。対象は腫瘍疾患22例、炎症疾患3例、その他2例の計27症例であった。ECT装置はGEのMaxi Camera 400 A/TとDECのPDP 11/34を、またXCT装置は東芝のTCT 60Aを使用した。他検査または手術所見を参考に、まずECTとプラナー像における存在診断および局在診断能を比較した。次に、ECTとXCTにおける存在診断と質的診断能を比較した。その結果、ECTはプラナー像と比べ存在診断および局在診断能ともに明らかに優れていた。また、XCTと比較し、質的診断能において若干劣るが、炎症の活動性とその局在あるいは浸潤性悪性腫瘍の進展範囲を評価する上に有用であった。今後、両CT画像の重ね合わせを含め、さらに検討してゆきたい。

## 29. 胸部X線所見とGa-67 scintigraphy所見との対比

加藤 高美 具志堅益一 井田 雅徳  
堀 浩 神取 祥和 村田 勝人  
小林 嘉雄 鎌田 憲子 綾川 良雄  
宮田 伸樹 (愛知医大・放)

Ga-67 citrateによるscintigraphyで、胸部に瀰漫性の集積を時に認めるが、集積機序に不明瞭な点も多く、臨床的な意義は不十分である。

昭和59年1年間に愛知医科大学で施行されたGa-67 scintigraphy 276例中、両肺に瀰漫性集積を示した28例を対象として、胸部X線所見との対比を行い、文献的考察を加え報告した。

胸部X線像で異常所見を示さなかった5例は、2例がlow grade infection、3例がinterstitial inflammationであった。基礎疾患として新たに、腎不全、心不全、糖尿病、輸血が推定された。